

命綱となった三陸縦貫道山田道路

釜石大槌地区行政事務組合釜石消防署
消防司令補 岩間 英治

防災講演会や地域自主防災組織への講習会などで、何時「宮城県沖地震」クラスの大地震が来てもおかしくないと、津波に対する警戒意識はありましたが、まさかあれほどの大津波が来襲するとは誰が予測できたでしょうか。

自宅が倒壊してしまうのではないかと感じるほどの大きな横揺れが三分近くも続きました。

東日本大震災があった3月11日の日、私は週休で自宅におり、外出しようと家を出た矢先に地震が発生しました。

この地震により「大津波警報」が発表されたので、今日は長丁場になるかも知れないと思い、自家用車で当時勤務先でありました隣町の「大槌消防署」へ向かいました。

この地震により市内は停電となったため信号機も止まり、道路は所々で渋滞しておりましたが、移動中に津波の第一波到達予想時刻が過ぎていた車内のラジオ情報を耳にし、また昨年2月28日に、南米チリで発生した大地震による「大津波警報発表」の際も特に大きな被害がありませんでしたので、慌てることなく車を走らせていました。

釜石市内を抜け、一週間程前に開通したばかりの三陸縦貫道山田道路の区間道を通って海岸線の国道に抜けた時のことでした。

道路が渋滞していたため停車していると、右手の海岸の方から見たこともない大きな黒煙がこちらに迫ってくるのが見え、対向車の運転手が窓越しから手を振って「逃げろ！」と叫んでいたのが、咄嗟の判断で国道をUターンし、海岸から離れた区間道の方へ引き返しました。

足を震わせながらアクセルを踏み込みましたが、ルームミラーには大津波が間近に迫っており、このままでは流されてしまうと思い、途中で車から降り、近くにあった杉林山林へ駆け上がりました。

大津波が押し寄せたのはこの直後で、ここの街が壊滅する悲惨な光景を目にしました。

ほとんどの家屋が津波で流され、中には屋根の上にしがみつきながら助けを求めている人もおりましたが、助けようにもどうする事も出来ず、ここに避難していた人達とただ呆然と眺めているだけでした。

幸いにも区間道の旋回場所へ放置していた私の乗用車は被災を免れましたが、この後も何度も津波が押し寄せ、ここの道路は浸水で寸断されてしまったため、車での移動はできなくなりました。

浸水の水位も大部下がり、津波の押し寄せも少なくなった時のことでした。

近くの区間道橋げたで、身動きが取れずに手を振って助けを求めている二人の人影が見えたので、何とかしなければ思い、車のトランクに入れてあった数本の小綱ロープを持って駆けつけ、「大丈夫か!」との叫び声に返事はありませんでしたが、橋の上から二人の姿を確認することはできず、自分一人だけの力で引き上げるのは難しい状況でした。

「橋の下に人がいます。手を貸して下さい。」と、ここの橋から少し離れた道路に避難していた人達に協力を求めたところ、十名近い人が駆けつけてくれ、中には消防で使用する安全帯のような資器材を持っていた人もおり、橋の下の二人に声を掛け合いながら、無事に引き上げることができ、この救助活動が今回の震災での最初の仕事となりました。

結局この日は山越えをして日没近くに大槌町へ抜けることができましたが、町の中心部は浸水に加え、火災も多発し、手がつけられない状況でした。

今回の大津波で町役場、消防庁舎も壊滅し、職場の同僚も三名失い、その内の二名が私の勤務する消防庁舎で被災しました。

思い返せば、自分が避難した三陸縦貫道山田道路の区間道は3月5日の日に開通したばかりで、この道路がなければ、津波の浸水を受けることとなる海岸沿いの国道を使って出勤していたこととなり、この新しい道路が自分の命綱となったのです。